

戦争の記憶を平和につなげる大分での出来事

—第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜の墓—

別府大学文学部国際言語・文化学科
教授 安松みゆき

はじめに

戦争において兵士が俘虜となり敵国で命を落とす。そのようなことは、歴史上しばしば起こることであり、通常は悲劇としてしか語り得ない。しかし、第一次世界大戦において大分に収容され、不幸にして病没したドイツ人の俘虜の場合には、100年後の今日、日独双方において人々の心を動かす出来事をもたらした。大分市にある旧陸軍墓地の桜ヶ丘聖地は、大分の人々が同地にあるドイツ人俘虜の墓を日本の兵士と分け隔てなく守り続け、2020年11月にドイツ人遺族の墓参が実現したのである。その墓には、大分収容所で病没した二人の海軍兵士、ユリウス・パウル・キーゼヴェッター Julius Paul Kiesewetter（以下ユリウス・キーゼヴェッター）とリヒャルト・クライン Richard Klein が眠る [図1]。

本稿では、時を超えて変わらぬ大分の人々の人道性を記録することを目的として、ここにドイツ



図1 桜ヶ丘聖地のドイツ兵士の墓
左クラインの墓：右キーゼヴェッターの墓
筆者撮影、所蔵

人俘虜の収容から今回の墓参にいたるまでの経緯を書き記しておきたい。その際に、墓参の経緯と実施の形式、大分収容所の事情、ユリウス・キーゼヴェッターの残された写真の同定、の三つの論点に分けて話をすすめる。

1 経緯～ドイツ大使館公式墓参の実施

2020年11月13日（金）、大分旧陸軍墓地においてドイツ兵の遺族の公式墓参がおよそ100年ぶりに実現した [図2]。その2年ほど前のことだが、美術史を研究する筆者に意外なところからのメールが入った。海上自衛隊幹部学校の本名龍児一等海佐（以下本名一佐とする）からである。本名一佐のドイツ人の友人は、親戚が第一次世界大戦時に大分の収容所で亡くなり、その墓を探していた



図2 公式墓参
日本語でスピーチするキーゼヴェッター大佐
橋会浦田裕氏撮影

が、それが筆者の論文に掲載されていたので情報を確認したいという内容だった。筆者は日独美術交流史をテーマとし、当時、版画家で日本美術史研究家のフリッツ・ルムプフ Fritz Rumpf の動向を追っていた。その際、ルムプフが第一次大戦時に大分収容所に俘虜として収容されていたことがわかり、同収容所に関して小論にまとめ、俘虜の墓についても言及していたのである²。

本名一佐からの連絡を受けたとき、筆者はちょうど東京の自宅にいたため、四谷駅そばの喫茶店でお会いすることになった。本名一佐の友人はドイツ大使館付武官カルステン・キーゼヴェッター大佐 Oberst Karsten Kiesewetter であった。大佐とゾフィア夫人、そして本名一佐とテーブルをともにして、今日なお大分に墓が整然と保存されていることや収容所のことなどを数枚の写真とともに伝えた。名前からわかるように、大佐は大分に眠るユリウス・キーゼヴェッターの親族で、大佐から見るとユリウスは曾祖父の弟にあたる。大佐は墓が現在も良好な状況に保たれていることを聞いて感銘を受け、すぐに墓参りに行きたいと要望された。そして同年末に、キーゼヴェッター大佐は、本名一佐、海幕長野晋作一佐とともに墓参を実現した。筆者はその時に誘いを受けたが残念ながら東京で学会があり同行できず、あとで本名一佐より墓参の報告を写真とともにメールで受け取った。

年が変わりドイツ大使館での公式墓参が計画された。大分県高齢者福祉課黒田光代課長や同課渡邊浩邦主幹、また墓地清掃に関係する大分県遺族会連合会、本名一佐が調整して海上自衛隊、陸上自衛隊も加わり、綿密な事前準備がすすめられた。

そして墓参当日を迎えた。11月13日午前11時すぎに墓地入口に到着した大佐は、ゾフィア夫人同伴で自衛隊に出迎えられた。ドイツ大使館の青山彌紀氏の司会および通訳により儀式がはじまり、大佐から流暢な日本語で、これまでの経緯と感謝が述べられた。その後陸上自衛隊西部方面音楽隊矢口幸一上等陸曹による、ドイツの追悼曲「私には戦友がいた」と日本の追悼曲のトランペットのソロの演奏のあと、収容所で病没した2名の兵

士、ユリウス・キーゼヴェッターとリヒャルト・クラインの墓に、大佐が花輪を献花した。墓の前には地元で生産されたみかんの供えられた祭壇が用意され³、大佐に続き、参列者が献花した。その後場所を変えて、大佐、神戸総領事館主席理事ウーヴェ・メアケッター Uwe Meerkötter 氏、大分県福祉保健部長廣瀬高博氏、自衛隊大分地方協力本部本部長井村昭利氏、地元自治会、志豊会、大分遺族会連合会長末光秀夫氏とその孫で別府大学大学院文化財学専攻で考古学を研究する末光博史氏による桜の植樹式が関係者が見守るなかで行われた⁴。

墓参のあと、大佐はこれまでの感謝の意を表すために関係者を大分のホテルでの昼食会に招待した。そこで改めて大佐は夫人とともに縁戚の墓を100年にわたって守り続けた関係者に謝意を伝えた。大佐の挨拶を受けて返礼したのが、実際に墓を守ってきた地元の自治会長園田一二氏だった。園田氏は、自治会を代表して挨拶し、当たり前のことをしてきてこれほど感謝されること、しかも遠い異国ドイツからであることを、まるで夢のようで光栄だ、と声を震わせて感動を伝えた。そして最後に園田氏は、ドイツ語で「ダンケ・シェーン」と心からの感謝の言葉で話を終えた。墓の清掃を淡々と続けた自治会への大佐からの感謝。それを受けた自治会長園田氏の感謝。互いに感謝をしあう光景は、心の通じ合う感動の一時となった。なお自治会では翌日に改めて桜ヶ丘聖地に大佐に来訪してもらい、実際に清掃作業をしてきた自治会員および関係者と交流を深めた [図3]⁵。

大佐の1日の行動は分刻みで計画されたため、昼食も50分ほどで終わり、柞原八幡宮を見学し、



図3 志手の地元と大佐夫妻との交流
橘会浦田裕氏撮影

最後に広瀬勝貞大分県知事への表敬訪問で行事が締めくくられた。コロナ対策で多忙を極める広瀬知事も時間を割いて100年来の墓参に感謝を示され、日田の下駄を大佐に贈呈し、今後の大分とドイツの交流につながることを期待する言葉を贈られた。

コロナ禍であったものの、公式行事が予定どおり終了した。墓参についてはすぐに大分合同新聞をはじめ、朝日、毎日、読売などの新聞各紙やNHKなどに取り上げられ、12月上旬には戦争を再考する文脈で、西日本新聞やTOSにおいて報道された。

2 第一次世界大戦時の大分収容所

今回の公式墓参により、大分におけるドイツ人俘虜の墓に注目が集まったが、そもそも大分収容所における俘虜の処遇がどのようなものであったのかを知る必要がある。そこで大分収容所について紹介し、あわせて今回親族の公式墓参につながったユリウス・キーゼヴェッターについて、情報を探してみよう。

1914年にはじまった第一次世界大戦では日本はドイツに宣戦布告し、三ヶ月後にはドイツ軍が降伏して日本が勝利した。その際におよそ4500名ほどのドイツ兵が俘虜となり、日本に移送された。日本では、九州や西日本を中心に福岡、久留米、熊本、大分、松山、丸亀、徳島、姫路、大阪、名古屋、静岡、東京に収容所が置かれた。大分収容所は仮収容の役割を持ち、その後習志野収容所に集約されて、大分収容所は1918年8月に閉設されている⁶。

さて日本についていえば、第一次世界大戦時の収容所での俘虜の扱いは、第二次世界大戦時とは異なって人道的であった。そこには駐日アメリカ大使館の協働者が、当時のジュネーヴ条約に準じて実施しているのかを各収容所を廻って確認したことに裏付けられる⁷。おそらく日本もその後大国の立場を確立するために、俘虜の扱いには留意したものと想定される。

そのような当時の状況下で各地の収容所で地元との文化交流が生まれた⁸。このことは、四国の

板東収容所でベートーベンの交響曲第9番が日本で初演されたことに象徴される。大分収容所でも俘虜たちは人道的な扱いを受けており、たとえば、収容所内ではテニス、サッカー、器械体操といったスポーツ [図4] や、演劇、人形劇、音楽会 [図5] などの文化活動を実施することも、収容所外への散歩も許されていた⁹。筆者が調べていたルムプフは文芸「パンの会」のメンバーだったため日本文化への知識があり、日本語も堪能だったことからか、収容所から別府市の繁華街まで夜遊びに出かけたことが記録されている¹⁰。

俘虜への扱いが人道的だったことは、収容所内での生活が規制されていなかったことだけでなく、かれらが収容所外に散歩に出かけられたという事実が物語っている。かれらはかなりの遠出の散歩を楽しんでおり、たとえば、これまで西寒田神社、柞原八幡宮、少林寺に出かけたことが、当時の写真から明らかになる。散歩の目的には日本文化を知ることもあったという [図6]。



図4 金池小学校の運動会に参加する俘虜たち

ドイツ日本研究所所蔵



図5 収容所内（金池小学校）で演劇する俘虜たち

ドイツ日本研究所所蔵

それにしてもかれらが散歩に出かける姿は、地元の人には大変珍しい光景だったと推測される。ルムプフはそうした光景を挿絵本『大分黄表紙 Oita Gelbbuch』に描きとどめている¹¹。その挿絵にはドイツ兵士が市中を列をなして歩く姿を、着物を着た女性や子供たちが足を止めて見ている光景が描かれている [図7]。またドイツ兵が残した写真からは、地元の人々がドイツ兵を見る機会はかなりあったと思われる。しかしそれによって地元の人が、兵士たちに不安を抱いたり、逆に兵士が地元の人々に不満をぶついたりといった話は見当たらない。たとえば散歩先の少林寺で撮られた写真には、寺の住職と思しき人物と多くの子供たちが写真におさまっており、住職と数名の子供は笑顔を見せている。そのことからむしろ地元の人々と交流し得ている印象を受ける¹² [図6]。

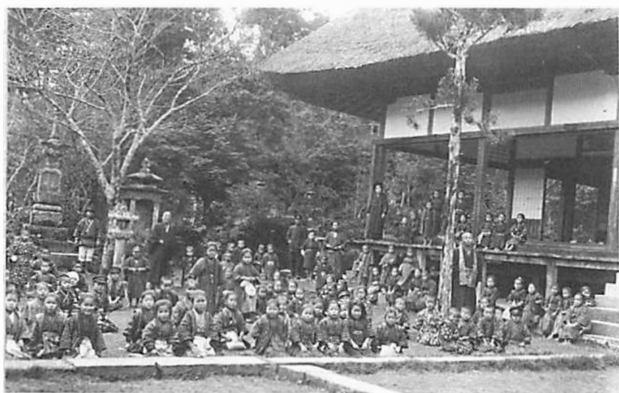


図6 遠足先の少林寺本堂前 住職と子供たち
ドイツ日本研究所所蔵



図7 『大分黄表紙』より
筆者撮影、所蔵

西新町界隈を振り返る1964年の大分合同新聞にも、当時のドイツ兵たちは人懐こく、近寄ってくる日本人に「ニコニコ話しかけるものがあった」と書かれている¹³。

大分収容所の特徴として、当時は大分第一尋常高等小学校、現在の大分市立金池小学校の一部の校舎を用いて収容所が設置されたことが挙げられる [図8]。第一次世界大戦のドイツ兵俘虜について研究する徳島大学教授井戸慶治氏によれば、日本国内の収容所のなかで小学校を使ったのは大分だけだったという¹⁴。子供を預かる学校を、しかも教育活動を維持しつつ、戦争俘虜の収容所とする選択がどのような理由でなされたのかは不明だが、当時の写真には前述したように、小学校の運動会に俘虜も参加していた [図4]。ここにもドイツ人の俘虜と大分の子供たちの温かい交流の痕跡が見出せるのである。

このような大分収容所にいたユリウス・キーゼヴェッターに話を移せば、これまでのところ、その情報は限られている。第一次大戦の俘虜を専門とする高知大学名誉教授瀬戸武彦氏によると、ユリウス・キーゼヴェッターは現在のポーランドのブレスラウ近郊のシェビッツ Schebitz 出身で、青島ではホテルを営んでいた。いつから青島に居住していたのかは不明とされる。日独戦によって第三海兵大隊第六中隊・後備二等歩兵として戦い、1914年に俘虜となり、熊本に収容されてから大分に移送された。大分収容所で1917年5月9日に病気で没した。

ハンス・ヨハヒム・シュミット Hans Joachim Schmidt 氏のHPによれば¹⁵、農地所有者の父



図8 大分第一尋常小学校 (現金池小学校)

森本卓哉氏所蔵

ゴットリーブ・キーゼヴェッター Gottlieb Kieseletter (1841年6月11年生—1889年4月11日没)と、母ロジーネ・パウリーネ・アウグステ・シュペルリヒ Rosine Pauline Auguste Sperlich (1843年ミュニーツ生—没年および場所不明)との間に1879年5月30日に生まれた。両親は戦争が始まる前から青島でホテルを経営したという。また別の情報源として、1916年12月1日の東京に住むクルップ会社の前日本総支配人ヴィルヘルム・ラントグラフ Wilhelm Landgraf 宛の葉書によると¹⁶、キーゼヴェッターの大分俘虜番号は4382で、かれは重い大腸炎にかかり、脱隊を考えたが実現せず、胸腔における内出血(動脈瘤)で没したと記されている。ドイツ日本研究所に所蔵されるキーゼヴェッターの死亡通知にも、重い病気に長い間患って亡くなったが、死因は胸腔における内出血であったと書かれている¹⁷。

このようにキーゼヴェッターの病没状況の事情が多少なりとも明らかになったが、そのことから、かれを写したとされる写真の同定において悩ましい問題が生じた。それについて次に取り上げる。

③ キーゼヴェッターの写真の人物同定をめぐる議論

11月13日の墓参を前に、ひとつ大きな問題が生じた。それはキーゼヴェッターの写真の特定であった。第一次大戦時のドイツ人俘虜たちは各収容所での生活を写真に撮って記録に残していた。大分収容所でも、一台の大型カメラが写る写真からすると少なくともカメラが二台あり、多くの写真が撮影されており、そのなかにキーゼヴェッターの葬儀に関する写真が認められた。さらに注目されるのは、亡くなる二ヶ月前とのメモのある、キーゼヴェッターの生前を撮影したとされる写真も、そこに含まれていたことである[図9]。

しかしその写真には、窓から顔を出す兵士が二人写っているうえ、どちらも長く病を患っていたとは思えない健康そうな面持ちで写真に写っていた。そのため、どちらがキーゼヴェッターなのかは写真からは判定できずにいた。

それでも従来この写真のうち左側の人物がキー

ゼヴェッターと見なされてきた。本名一佐は、遺族のカルステン大佐の容貌を参考にして左側と考えて最初の墓参にはその写真を持参していた。

ところが、この見方に一旦再考が必要となる異論が示された。徳島大学教授の井戸慶治氏は、第一次大戦時のドイツ兵ヨハン・ディートリヒ・クロップ Johann Dietrich Klopp の遺族から鳴門ドイツ館に寄贈されていた写真アルバムのなかにも大分収容所のキーゼヴェッターの写った同じ写真が含まれていることを確認された。そのアルバムにもメモが書かれており、そのメモはアルバムの黒地に赤字で書かれていたため大変見づらかったが、メモの一部にキーゼヴェッターの名前と没年が認められ、そのメモの書かれた位置から右側の人物がキーゼヴェッターの可能性が考えられたのである。とはいえユリウス・キーゼヴェッターの写真は、この同じネガから印画された二枚の写真以外には見出されておらず、遺族の手元にも残っていないとのことで、クロップのアルバムの右側の人物の可能性はあるものの、判断ができない状態が続いた。

そのうち本名一佐より、写真のひとはアルバムの所有者だったクロップなのではないかとの仮説が提示され、クロップを特定することで、キーゼヴェッターを明らかにすることになった。

本名一佐と井戸氏は、アルバムを寄贈したクロップの長女の画像や、アルバムにあったクロップと特定できる写真と比較したものの、同定するまではいかなかった。また本名一佐から、クロッ

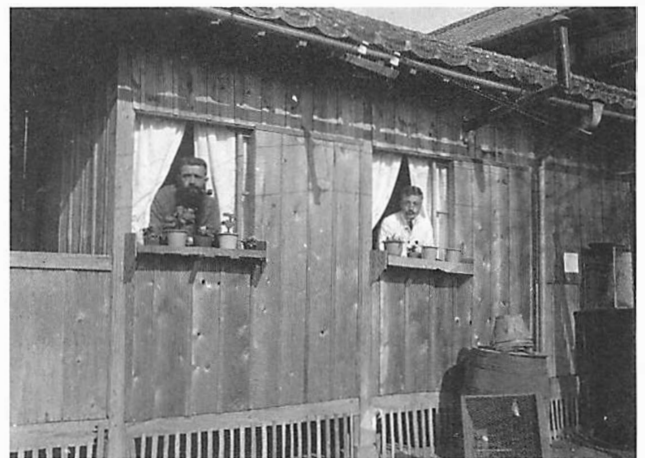


図9 収容所内のキーゼヴェッター(左の可能性)の写真

ドイツ日本研究所所蔵

ブは陸軍伍長のため、写真のような制服にはならないが、陸海軍混成部隊のため着回した可能性も否定できないとの指摘があり、この時点では特定にいたらなかったものの、制服という新たな手がかりへの注目が促された。

一方、判読が難しかったクロップのアルバムのメモについては、徳島大学名誉教授の川上三郎氏が改めて画像処理をして解読され、「17年5月10日、キーゼヴェッターが亡くなる二ヶ月前」と書かれていたことがわかった。ただ川上氏も、写真のどちらがキーゼヴェッターなのかはわからないとの回答だった。

その後、そのメモの上に書かれた文字が「Sch・・rn」（語頭のSchはGe, Je, Peとも読める）と綴りの一部しか読めない。しかし筆者にはそれが人名ではないかと気になり、本名一佐にそのことを伝えたところ、本名一佐が「・・rn」で終わる名前を俘虜リストから検索し、ショルン Schorn 姓（名はフリッツ Fritz）の兵士を探し出した。さらにハンス・ヨハヒム・シュミットによる俘虜名簿でも、ショルンは上級水兵で海軍の制服でない点で一致するとし、本名一佐の情報も加わって写真右側の人物がショルンの可能性がでてきた。

この右側をショルンと見る説によって右側クロップ説には疑問が生じ、いずれにせよキーゼヴェッターが右側の人物の可能性は薄れた。そして本名一佐は改めて写真左の人物の服装は当時の海軍陸戦服に似ており、それならばキーゼヴェッターと一致する、と指摘された。その後川上氏もキーゼヴェッターが海軍兵士だったため、右側の人物の服装は明らかに海軍兵士ではないことから、左がキーゼヴェッターと想定された。井戸氏もこの説を支持し、筆者も、メモの文字が兵士の名前ショルンと読めることから、三氏の指摘のとおり、左をキーゼヴェッターと見做し、現時点での結果として全員で左側の人物をキーゼヴェッターと特定したのである。

以上の結果を受けて、公式墓参の際には本名一佐が準備した左側の人物の写真を、墓に備えることになった。

● 終わりに 墓参が意味すること

第一次世界大戦時の日本における俘虜収容については、各収容所で状況の違いがあるものの、全体として文化交流については注目すべき出来事が指摘されている。たとえば板東収容所におけるベートーベンの交響曲第9番演奏のエピソードはよく知られるが、千葉の習志野収容所の俘虜からは、ユーハイムのパウムクーヘンやローマイヤーのウィナーなどが日本に伝えられた¹⁸。

大分収容所については、これまでフリッツ・ルムプフが制作した挿絵本『大分黄表紙』（習志野収容所で印刷）が知られていたが¹⁹、今回の墓参につながった交流は、収容所の閉所後の活動が基盤となった。不幸にして収容所で病死したドイツ人兵士の墓を、100年の歳月を超えて地元大分の人々が守り続け、そのことが現在の日独交流を導いたのである [図2、3]。このことから遡って収容所が存在した当時の写真を見ると、ドイツ人俘虜と地元の人々、特に子供たちとの自然な交流があったことに気づかされる。収容所が存在した当時から、墓だけが残されたその後の時代まで、大分の人々が示した姿勢は一貫していたと見なすことができよう。

最近、ドイツ兵が訪れた遠足先の同定について、本名一佐が少林寺の新聞記事を、大分県高齢者福祉課主幹渡邊浩邦氏は西寒田神社の武器庫の史料を入手して実際に現地で確認し、裏付けを増した。さらに今、井戸慶治教授によって大分収容所の俘虜ヤーコブ・ノイマイアー Jakob Neumaier の日記が翻訳されはじめ、前半分が前述したクロップアルバムからの珍しい写真も掲載されて刊行された²⁰。戦争や収容にかかわる歴史ではあるが、大分収容所についてさらに多くを知り、伝えることが求められる。

本稿をまとめるにあたり、井戸慶治徳島大学教授、川上三郎徳島大学名誉教授、瀬戸武彦高知大学名誉教授、海上自衛隊幹部学校本名龍児一等大佐、元別府大学図書館の吉岡義信氏、森本卓哉医師、橘会浦田裕氏に情報の提供をいただいた。最後に地域社会研究に寄稿する機会を地域社会研究委員会長の篠藤明德別府大学教授に与えていただいた。改めてここに心より感謝申し上げる。

- 1 現在聖地は、大分県より大分遺族会連合会が管理を受託し、維持管理を地元の志手地区の街づくりグループ「志豊会」によって行われている。「大分県遺族新聞」令和3年1月15日。
- 2 拙稿「大分にあったドイツ人俘虜収容所」『芸術学論叢』別府大学文学部芸術文化学科、18号、2009年、114-130頁（以下、安松『芸術学論叢』2009年と略記）。拙稿「第一次大戦期のドイツ人の俘虜生活と美術活動—日本美術史家および版画家フリッツ・ルムプフと大分収容所の場合」『別府大学紀要』46号、2005年、55-70頁。
- 3 大分市の志手地区は明治期からみかんの生産、そして昭和50年代からはボンカンの生産でも知られる場所である。「志手ボンカンは日本一」キヤノン会長が舌鼓」『志手橋会ニュース』2020年6月。
- 4 大分県議会議長麻生栄作氏、遺族会連合会事務局長十時浩司氏、防衛省防衛研究場研究幹事庄司潤一郎氏、防衛省陸上幕僚監部二等陸佐山添直智氏、みえ記念病院副院長で郷土史家森本卓哉氏も尽力者として参列された。
- 5 志手の自治会や遺族会の方々を中心に、事前に日の丸とドイツの国旗、さらに参加者全員に遺族会事務担当の渡邊まなみ氏と御家族による手作りの日独の紙製の国旗が用意されて、大佐夫妻を歓迎した。自治会の方々は、前日の墓参行事を駐車の問題なく円滑にすすめられるように、墓地周辺のごみや、外に置かれた鉢植えなどを一時的に撤去するなど、細やかな配慮を示された。前日の行事は一部の関係者に限られたため、自治会の方々にとってこの日が交流の時間となった。自治会から大佐には名産のみかんが、大佐からはドイツビール（ダース）が、ゾフィア大佐夫人からは特別のシャンパンが贈られた。また園田忠明氏と園田英二氏からは詩吟と色紙が大佐に贈られた。
- 6 富田弘『日独戦争と在日ドイツ俘虜 板東俘虜収容所』法政大学出版局、1991年、9-10頁。瀬戸武彦『青島から来た兵士たち—第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同人社、2006年、101頁。特に青島での状況が詳しい。
- 7 Besuch verschiedener Gefangenschaft in Japan durch Mitarbeiter der amerikanischen Botschaft in Tokio. Reichsmarineamt BArch RM 3/6869 Bd. 11 Bundesarchiv
- 8 習志野市教育委員会編『ドイツ兵の見たニッポン 習志野俘虜収容所1915-1920』丸善、2003年。鳴門市ドイツ館史料研究会『松山のドイツ兵捕虜と収容所新聞「ラガーフォイアー」』愛媛新聞社、2019年。
- 9 安松『芸術学論叢』2009年、114-130頁。
- 10 夜遊びの場として、西大分のカンタンの女郎屋だったという指摘もある。大分合同新聞1962年12月21日「ドイツ人捕虜たち」。この記事は別府大学図書館の吉岡義信氏より提供を受けた。ここにお礼を申し上げたい。
- 11 安松『芸術学論叢』2009年、114-130頁。
- 12 少林寺で撮られた写真は、堂内で寛ぐ俘虜たちの姿を記録にとどめている。そのなかの写真をよく見ると、本堂の縁側に座る俘虜の足元に何十本ものビールが置かれている。木箱にキリンビールと書かれている。やはりドイツ人はビールを好んでいたことがわかり、また遠足が俘虜たちには癒しの時間だったことが改めて理解できる。
- 13 大分合同新聞1962年12月21日「ドイツ人捕虜たち」。
- 14 井戸慶治「大分俘虜収容所に関するノイマイアーの日記」『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第16号、「青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究会刊行会、2020年、67頁。
- 15 Die Verteidiger von Tsingtau und ihre Gefangenschaft in Japan (1914 bis 1920) Historisch-biographisches Projekt von Hans Joachim Schmidt (seit 2002) <http://www.tsingtau.info> Landgraf は、東京赤坂表町3-15に住んでいた。
- 16 「在日ドイツ人俘虜の救済義捐活動に積極的に取り組んでおり、各地多数のドイツ俘虜と郵便物を交換していた」とされる。日独戦争の俘虜郵便。高橋スタンプのHPより。 <http://www.takahashistamp.com/mokuji2-2.htm>
- 17 日刊電子 Täglicher Telegrammdienst Band am 16. Mai 1917. この史料はドイツ日本研究所に所蔵される電子データであり、そこには資料の概略として、「死亡通知1917年キーゼヴェッターは大分収容所で死去しました。死因は内出血です。（ブッターザック署名）」と記されている。
- 18 習志野市教育委員会編『ドイツ兵の見たニッポン 習志野俘虜収容所1915-1920』丸善、2003年、115-119頁。
- 19 安松『芸術学論叢』2009年、114-130頁。
- 20 井戸慶治「大分俘虜収容所に関するノイマイアーの日記」『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第16号、青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究会刊行会、2020年、65-89頁。なおノイマイアーは習志野収容所に移送されており、習志野収容所でも記していた日記部分はディルク・ファン・デア・ラーン氏によって訳出されている。習志野市教育委員会編『ドイツ兵の見たニッポン 習志野俘虜収容所1915-1920』丸善、2003年、167-202頁。その後、2021年3月26日にキーゼヴェッター大佐とゾフィア大佐夫妻は、広瀬大分県知事非公式訪問のため、通訳の青山彌紀氏とともに大分に来訪した。午前中に到着し、大分県高齢者福祉課長黒田光代氏、同課長補佐浜松弘一氏、同主幹渡邊浩邦氏、大分県企画振興部副主幹山崎基広氏、地元の園田一二氏、園田忠明氏や自治会の方々の出迎えを受けて墓参を行い、昼食後、今秋の墓参に合わせた写真展の会場となるホルトホールを視察し、西寒田神社を訪問した。同神社では別府大学大学院文化財専攻を修了した稗田貞臣権禰宜に貴重な史料や神社内部に当時から残る樹木について解説いただいた。最後に大佐夫妻には別府大学に来訪いただき、今秋に別府大学でも写真展と講演を計画しているため、飯沼賢司学長の案内で18号館ギャラリーや大教室を視察された。写真 [図10] は、前回の桜ヶ丘聖地墓参での植樹、およびキーゼヴェッター大佐と地元の方々との交流を記念してつくられた解説板「日独友好の桜」を前に撮影された大佐夫妻である。



図10 「日独友好の桜」解説板を前にした
カルステン・キーゼヴェッター大佐とゾフィア夫人
橋会浦田裕氏撮影